鷲見五郎『やさしくたのしいピアノメソード』改訂版の特徴

―全体的な構成に着目して―

山川 智馨（Chika YAMAKAWA）

鳥取短期大学 幼児教育保育学科

はじめに

鷲見五郎（1916-2000）は、2020（令和２）年に没後 20 年を迎えた鳥取県米子市出身の音楽家・音楽教育者である。五郎は「日本ヴァイオリン界の父」と称される鷲見三郎（1902-1984）を兄に持ち、自身も第６回毎日音楽コンクール（現・日本音楽コンクール）ピアノ部門における男性初の上位入賞を機に演奏活動を開始し、ピアニストや作編曲家、指揮者として幅広く活躍した。また、白梅学園短期大学にて 1966（昭和 41）年から 21 年間にわたって保育者養成における音楽教育に携わり、現在の同大学が「保育の白梅」と称される土台を築いた重要人物の１人でもある。五郎は兄の三郎をはじめ、「ふるさと」の作曲者である岡野貞一や言文一致唱歌を提唱した田村虎蔵、「水色のワルツ」等の作曲者である高木東六などの鳥取県出身の音楽家たちに比べると、決してよく知られた存在ではない。しかし、彼の功績は埋もれたままにしておくわけにはいかないものばかりである。

筆者は先行研究で演奏者や教育者としての功績をはじめとする五郎の人物像について概観を述べ、再評価のきっかけとした[1)]。五郎は多様な演奏活動を展開する中で、ヴァイオリニストの巌本真理や江藤俊哉といった国際的なソリストの伴奏者として特に活躍した。教育者としては白梅学園短期大学教養科の教授および名誉教授時代にピアノ教則本を複数刊行し、同大学の保育者養成におけるピアノ教育に大いに貢献した。また、五郎は教会オルガニスト兼聖歌隊の指揮者としても活動したほか、オルガン曲集を３冊刊行するなど、生涯にわたってキリスト教と深い関わりを持ち続けた。さらに、五郎が通った良善幼稚園の園歌を作曲したり、趣味で手掛けていた絵画の個展を開催したりするなど、故郷の米子市ともつながりを持っていた。

五郎の再評価に向けた新たな試みとして、本稿では音楽教育者として重要な功績であるピアノ教則本『やさしくたのしいピアノメソード』を取り上げる。本教則本は 1981（昭和 56）年に第１巻、翌年 1982（昭和 57）年に第２巻、1989（平成元）年に改訂版がそれぞれ共同音楽出版社から刊行された。このうち、改訂版は白梅学園短期大学保育科（以下、『白梅』と表記する。）で 10 年以上にわたり使用されてきた実績がある[2)]。先行研究ではこの改訂版について、序盤の楽曲からト音記号とヘ音記号の大譜表を使っていることや、１曲１曲に親しみやすいタイトルが付されていること、民秋言・元白梅学園短期大学教授の「先生の赴任までは、バイエルなど一般に市販されて用いるテキストを用いていた。先生は、『白梅にオリジナルな音楽教育を』という思いを強くもたれた。」[3)]という言葉から、当時のピアノ学習において定番だったバイエルから脱却し、独自の教育を目指していたのではないかと推測した。

以上のことから、本稿では『やさしくたのしいピアノメソード』の改訂版に着目する。その理由は白梅での使用実績に加え、改訂によって教則本の完成度が上がり、第１・２巻よりも五郎の教育観が

反映されているのではないかと考えたからである。本稿では、まず『やさしくたのしいピアノメソード』の成立や位置づけについて、この時代のピアノ教則本に関する背景や文献をもとに検討する。そして楽曲の詳細な分析に入る前の段階として、「概要」「教則本の目的」「学習事項」「楽曲の構成」「最初の音域」の５項目を他の教則本と比較することにより、改訂版の全体的な構成に関する特徴を見いだすことを目的とする。

１．『やさしくたのしいピアノメソード』の成立と位置づけ

『やさしくたのしいピアノメソード』の前身にあたる教則本に、1973（昭和 48）年 10 月 30 日にワコー楽譜出版社から刊行された『PIANO METHOD』がある。これが白梅にとって初となる独自の教則本であり、著者である五郎の他に当時の白梅でピアノレッスンを担当していた 12 名の教師たちの氏名が協力者として記載されている[4)]。1976（昭和 51）年には改訂版が刊行されている。

『PIANO METHOD』の作成に携わった今井久仁子・元白梅学園短期大学保育科教授の経歴には、「1973 年４月～10 月迄　学長の特命及び保育科承認のもとに新しくピアノ教則本作成のため、非常勤専任教授鷲見五郎音楽研究室（田園調布）へ毎週出張 co-operator として業務に当たる」[5)]という一文が記載されている。この一文から、白梅独自の教則本を出版することは学長の特命であり、学科の重要な任務として取り組まれていたことが読み取れる。また、今井は 1979（昭和 54）年に「青年初学者のピアノ入門書としての〈BEYEL〉の長所・短所と白梅における新しいメソードの試み」という論文を『全国保母養成協議会 18 回研究会誌』で発表している[6)]。この論文の詳細は不明であるが、バイエルからの脱却を図り、白梅独自のピアノ教育を目指していたことが、そのタイトルから推測できる。

その後、1981（昭和 56）年に『やさしくたのしいピアノメソード』の第１巻、翌年 1982（昭和 57）年に第２巻、白梅の名誉教授となった 1989（平成元）年に改訂版が共同音楽出版社から刊行された。『やさしくたのしいピアノメソード』には協力者の記載はなく、五郎が単独で手がけたものであると思われる。そして改訂版は現在では絶版になっているものの、2018（平成 30）年度まで同短期大学保育科の「音楽Ⅰ」の授業で使用され、長年にわたって白梅の学生たちのピアノ技術を支え続けることになった[7)]。

我が国では、1880（明治 13）年にアメリカ人教師のルーサー・ホワイティング・メーソン（1818–1896）によって日本にもたらされた『バイエルピアノ教則本』（以下、『バイエル』と表記する。）が長らくピアノ学習の主流を占めていた[8)]。保育者養成のピアノ教育においても同様であり、白梅でも五郎が赴任する前はバイエルが使用されていた[9)]。『メトードローズ・ピアノ教則本』の邦訳をはじめとした国産の教則本が作られるようになるのは 1950（昭和 25）年代からであるが、この頃に保育者養成用として編纂された教則本はまだ多くないと思われる[10)]。1976（昭和 51）年の調査では養成校の 93%が、2000（平成 12）年の調査では 54%がバイエルを使用していたことが報告されており、バイエルの影響力がいかに高いかを物語っている[11)]。そのような時代背景の中で、バイエルからいち早く脱却し、独自のピアノ教育を目指した点で五郎の一連のピアノ教則本は先駆的であり、価値ある存在と捉えることができるだろう。

なお、『やさしくたのしいピアノメソード』の改訂版の出版と同時期の 1989（平成元）年に、『学生のためのピアノメソード』という教則本が共同楽譜出版社から刊行されている。この教則本も『やさしくたのしいピアノメソード』第１・２巻を元本に作られたものだが、白梅学園短期大学保育科ピアノ編集委員会の編著である。「このメソードは、ピアノメソード Vol. 1 と 2 の中から、短期大学保育科・幼児教育科などの教科書として、また、シニアからのピアノレッスン用として、音符の大きさを研究し、改めて編集し直したものです。」[12)]と学生用に作られたことが明記されているが、五郎自身の関与や白梅での使用実績は不明である。

２.『やさしくたのしいピアノメソード』改訂版について

ここでは中村（2015）[13]と山路（2020）[14]の先行研究および山本（2017）の『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』[15]を参考に、複数の教則本と比較しながら『やさしくたのしいピアノメソード』の改訂版（以下、『本教則本』と表記する。）の特徴を項目ごとに述べていく。

（1）比較に用いる教則本

比較対象は白梅でかつて使用されていたバイエルのほか、『メトードローズ・ピアノ教則本　ピアノの一年生』『トンプソン現代ピアノ教本』『バーナム　ピアノテクニック』『グローバー・ピアノ教本』『バスティン　ピアノライブラリー　ピアノレッスン』（以下、『メトードローズ』『トンプソン』『バーナム』『グローバー』『バスティン』と表記する。）の６種類とする。その理由は、いずれも本教則本より前に日本語版が出版され、かつ「バイエル・ピアノ教則本と比較されることの多い」[16]教則本であることから、本教則本に何らかの影響がみられるのではないかと考えたからである。

なお、バイエルは数多くの版が存在するが、本稿では本教則本より前に出版され、白梅で使用されていた可能性の高い全音楽譜出版社の『全訳バイエルピアノ教則本』を使用する。また、バスティンは中村と山路の先行研究および山本のガイドブックのいずれも『ピアノベーシックス』が取り上げられているが、この日本語版が刊行されたのは本教則本と同じ 1989（平成元）年であるため、本稿では旧シリーズの『ピアノレッスン』を使用する。

比較対象とする教則本の作者および訳者、出版国、初版年は表１のとおりである。

表１　比較対象の教則本

教則本	著者	訳者	出版国	初版年
全訳バイエルピアノ教則本	フェルディナンド・バイエル	全音楽譜出版社出版部	ドイツ	1851 年
メトードローズ・ピアノ教則本 ピアノの一年生	エルネスト・ヴァン・ド・ヴェルド	安川加寿子	フランス	1901 年ごろ／日本語版 1951 年
トンプソン現代ピアノ教本	ジョン・トンプソン	大島正泰	アメリカ	1936 年／日本語版 1972 年
バーナム　ピアノテクニック	エドナ・メイ・バーナム	大島正泰、訳・解説：中村菊子	アメリカ	1950 年／日本語版 1975 年
グローバー・ピアノ教本	ディビッド・カー・グローバー、ルイス・ギャロウ		アメリカ	1967 年／日本語版 1979 年
バスティン　ピアノライブラリー ピアノレッスン	ジェームズ・バスティン	日本バスティン研究会	アメリカ	1976 年／日本語版 1979 年

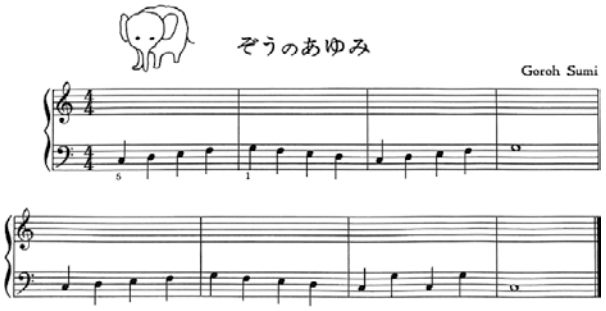
（2）結果

1）概要

本教則本は第１巻から 157 曲中 97 曲、第２巻から 49 曲中 15 曲が抜粋され、新たにベートーヴェンの「エリーゼの為に」を加えた計 113 曲が 134 ページの１冊にまとめられている。五郎自身が描いた水彩画が表紙と裏表紙のデザインになっており、各曲のタイトルにちなんだ挿絵も描いている（図１、譜例１）。

他の教則本で１冊のみになっているものは、バイエルとメトードローズである。トンプソン、バーナム、グローバー、バスティンは、いずれも数冊に分かれている。さらにバーナム、グローバー、バスティンは、併用教材のシリーズもある。保育者養成校において、冊数の多い教則本をそのまま使用するのは難しいことであると中村（2015）[17]が指摘しており、ここに本教則本が第１・２巻の２冊から１冊に改訂された意義が見いだせる。また、１冊のみのバイエルとメトードローズのうち、バイエ

図１　本教則本の表紙



譜例１　本教則本　p. ８より

ルは楽曲にタイトルがなく、番号が振られている。番号付きの楽曲は106曲あり、本教則本と曲数が近い。メトードローズは左側のページに予備練習、右側のページにタイトル付きの楽曲が並んでいるが、タイトル付きの楽曲は48曲である。

挿絵はメトードローズが大きさとしては最も似ている。ただし、１曲につき１つの絵が白黒で、それも著者自身によって描かれているという点はバーナムと同じである。バイエルには挿絵がなく、トンプソン、グローバー、バスティンは反対に挿絵が大きく描かれている。

なお、他の教則本の対象年齢は、バイエルは幼児から小学校低学年のほか、大人も含まれている。メトードローズは、子どもが本を読めるようになる満５・６歳から音楽を教え始めることを推奨している。トンプソンは８～10歳ぐらいの子どもが対象である。バーナムは、導入書であれば幼児の最初のレッスンから使えるようになっている。グローバーも導入編は年少の初心者を想定しており、年長の初心者であればVOL.１から使用可能である。バスティンは具体的な対象年齢は記載されていないが、現在の『ピアノベーシックス』と同等と考えるならば、７歳以上である。したがって、白梅の学生向けに作られた本教則本と対象年齢が最も近いのは、バイエルということになる。

２）教則本の目的

本教則本について、「はじめに」には次のように記載されている[18]。

●初歩のピアノ導入に関しては、（中略）大切なことは、まず出発の時点から音楽のよろこびを与えるようなものでなくてはならないこと、学習者に躓きを与えないように配列に細心の注意をはらったものでなくてはなりません。

●この本は、はじめてピアノを学ぶ人が、楽しく練習してゆくうちに、知らず知らずにテクニックが身につくように工夫して作りました。テクニックのいろいろな形を教えるためにも民謡風なメロディーにかたよることなく、楽しく弾けるメカニックな練習曲もとり入れてあります。（例36頁、水にうつった景色57頁、バロック風のエチュード）

●かなりはじめのうちからト音記号とヘ音記号の二段譜表を使い、両手で弾く喜びを早くから与えます[19]。出発は音感のつきやすい音域である中央のドから、左手は和声の基礎である根音から始めます。（例11頁、小さなおどり）

●ピアノを学ぶうえで読譜の躓きは起りやすいものです。この本では読譜の錯覚を防ぐために

特に作った曲も随所に入れてあります。（例 35 頁、人間とおうむと小鳥とライオン）（後略）

●曲は和声的なものだけではなく、やさしい対位法的なものも入れてありますので、右手偏重になることは勿論ありません。（例 45 頁、小熊のガボット）

●曲の程度は順を追って少しずつむずかしくしてありますが、新しい音域やテクニックをおぼえる時は、それに集中させるため、その曲全体としてはやさしくしてあります。（例 25 頁、石のかいだん）

●この本は以上のような工夫をして作りました。この本によって練習される方々がピアノの世界に入って、すこしでも音楽のよろこびが得られるならば、これほど嬉しいことはありません。

上記から、本教則本は初学者の段階から音楽の喜びやピアノの楽しさを感じることや、その中でテクニックを身につけることができるような配列にこだわったことがわかる。このような目的はメトードローズやグローバーに近い。メトードローズの「はしがき」には、「この本は（中略）無理なくしらずしらず上達するように書かれている。」「（前略）子どもに興味を持たせるように、できるだけ親しみやすく、おもしろくつくるようにつとめた。」[20]と書かれている。グローバーも導入編において「初心者にとって楽しくおけいこを進められ、自然に音楽上の知識が身につけられるように組まれています。」[21]と書かれており、いずれも初学者が楽しみながら練習していくうちに、自然にテクニックを身につけるという本教則本の目的と合致する。他の教則本をみると、バイエルは初心者のために美しい弾き方がすぐわかるように書かれたものだと伝言が残されている。トンプソンは基礎をつくることや、生徒が音楽的に感じ、考えることが出来るようにすること、さらに大きな楽曲の形式を組み立てられるようになることを目標としており、音楽的な要素が強い。バーナムは子どもの音楽性を豊かにすることと、それを表現するための「強い手と柔軟性のある指をつくること」[22]を目的として書かれたものである点で、若干の違いがみられる。バスティンは「オリジナル曲と、選び抜かれた民謡（フォーク）を楽しく、学習する」[23]とされている。楽しく学習するという点では共通しているが、テクニックの習得に関する言及はない。これは音楽表現のためのテクニックを習得するのは、別のシリーズである『テクニックレッスン』とされているためである。

3）学習事項

本教則本は〈両手の練習〉〈八分音符の練習〉など、12 種類の学習事項が括弧書きで明確に示されている（表２）。その他に、音名や音部記号、音域、音階とカデンツ、調性、ペダルに関する内容も含まれている。学習事項が示されていることで、練習の目的が分かりやすいという利点がある。この点は楽曲主体で進むバイエルと異なり、それ以外の教則本と共通している。ただし、括弧書きの学習事項は奏法や音価に関するものだと思われるが、「休符の種類」「タイと附点四分音符」「ペダルの使い方」には括弧が付されておらず、厳密な区別は難しい。

序盤の「右手ト音記号の練習」「左手ヘ音記号の練習」「右手の新しい音域」では音符を記載された順に弾く練習や、五線に音符を書く練習が設けられている（図２）。このワークブックのような要素は、トンプソンの第１巻やグローバーの導入編、第１巻、第３巻、バスティンにみられる。ただしこれ以降はなく、トンプソンやグローバー、バスティンに比べるとごく僅かな量である。

また、本教則本には予備練習が１つあり、タイと付点４分音符の練習で置かれている。この予備練習は楽曲のフレーズが用いられ、機械的な練習にならないための工夫がみられる（譜例２）。予備練習はメトードローズが左のページに置いているのが特徴であるが、「どんなに小さな予備練習や練習曲でもメロディックになるようにつとめた」と記載されており、本教則本への影響が示唆される。トンプソンとグローバーにも予備練習がいくつか置かれているが、本教則本と同様に楽曲のフレーズを使っている。バイエルは番号が振られていない番外曲が 12 ほど挿入されているが、音楽的な要素が少なく、面白みはないとされている[24]。バスティンはごく単純な予備練習と、民謡のフレーズを使った予備練習どちらもある。バーナムは予備練習がない。

表２　学習事項および開始曲

音の名前	なし	指をくぐらせる練習	42 曲目（水にうつった景色）
右手ト音記号の練習（C4-G4）	1 曲目（二拍子）	ハ長調音階とカデンツ	44 曲目（臨時記号の練習）
左手ヘ音記号の練習（C3-G3）	4 曲目（ぞうのあゆみ）	ト長調音階とカデンツ	47 曲目（元気な騎手）
両手の練習	5 曲目（チェロをひく人）	六度音程の練習	53 曲目（小熊のガボット）
右手の新しい音域（C5-G5）	14 曲目（おねだり）	ニ長調音階とカデンツ	54 曲目（回転木馬）
休符の種類	17 曲目（ものまねごっこ）	イ長調音階とカデンツ	59 曲目（冬）
八分音符の練習	19 曲目（春のおとずれ）	イ短調音階とカデンツ	64 曲目（悲しみ）
新しい音（A5）	21 曲目（おしゃれな帽子）	ヘ長調音階とカデンツ	67 曲目（谷間の教会）
タイと附点四分音符	22 曲目（星がひかる）	持続音の練習	71 曲目（星ぞら）
左手の新しい音域（G3-C4）	24 曲目（シンフォニーより）	ニ短調音階とカデンツ	73 曲目（見しらぬ国）
右手の新しい音域（G4-C5）	25 曲目（小さな音楽隊）	変ロ長調音階とカデンツ	76 曲目（きよし　このよる）
スタッカートの練習	30 曲目（カッコウ）	ト短調音階とカデンツ	78 曲目（きいちご（おどりの曲））
右手の新しい音域（G5-C6）	32 曲目（ドイツのうた）	変ホ長調音階とカデンツ	82 曲目（やさしい音楽は流れて）
三連音符の練習	34 曲目（太陽の国）	半音階の練習	83 曲目（ワルツ）
三度音程の練習	37 曲目（かざぐるまとチューリップ）	いろいろな調の練習	84 曲目（美しい流れ）
十六分音符の練習	38 曲目（バッグパイプ）	アルペッジョの練習	101 曲目（空中ブランコ）
新しい音域（C3-C2）	39 曲目（たいことラッパ）	ペダルの使い方	106 曲目（ペダルの練習曲）
左右の手の加線の練習	40 曲目（お日さまの日の光）		

（註）網掛けになっている学習項目は、本教則本の中で〈　〉で記載されていたものを表す。
　　括弧書きで記載してある音域は、筆者が書き加えた。

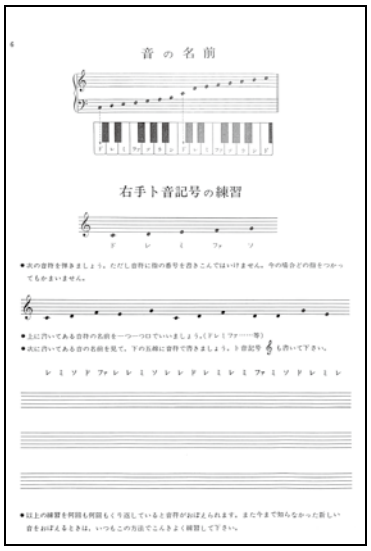
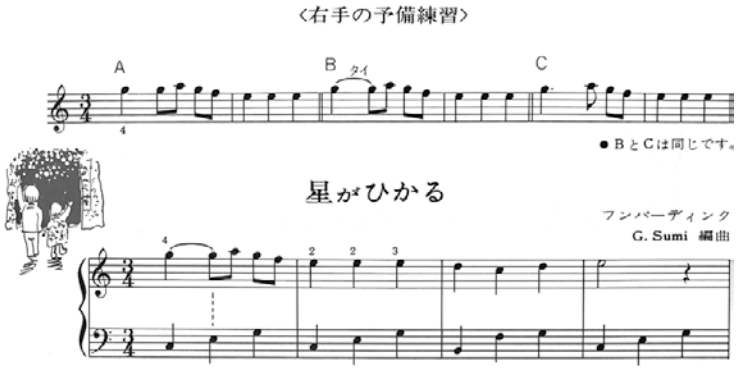


図２　本教則本　p. 6



譜例２　本教則本　p. 21 より

本教則本のみにみられる特徴としては、「音域」という言葉を使って音の高さを明確に意識させている点である。他の教則本では「音域」という言葉はみられず、バイエル、メトードローズ、トンプソン、グローバー、バスティンは「位置」という言葉を使っている。バーナムは「音域」「位置」といった言葉や鍵盤の図は出てこない。また、終盤には〈いろいろな調の練習〉として、これまでに学習した調性の総まとめのような学習事項が置かれている。数種類の調性を学習するのはバイエル、メトードローズ、トンプソン、グローバー、バスティンも共通しているが、調性の総まとめにあたる学習項目は見当たらない。このことから、本教則本では音域や調性を意識させることで、単に手や鍵盤のポジションとして覚えるだけでなく、音感も身につけさせたかったのではないかと考えられる。なお、

バーナムは移調の学習を想定して全曲がハ長調で書かれているため、他の教則本と調性の学習方法が異なっている。

4）最初の音域

本教則本の最初の音域は、右手がC^4～G^4、左手がC^3～G^3となっている。山本(2017)の『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』では、この音域は「Cポジション」とされているが、初学者向けの教則本はト音記号２段で始まる「ト音記号ポジション」、C^4から少しずつ音域を広げていく「ミドルCポジション」、広い音域で多くの調を学習者自身が弾く「全調」の３種類が多数を占めている[25](図３)。本教則本の「はじめに」では、「出発は音感のつきやすい音域である中央のドから、左手は和声の基礎である根音から始めます。」[26]と述べられている。中央のドはC^4、左手の根音はC^3を指すが、音感を身につけるという明確な意図が読み取れる。

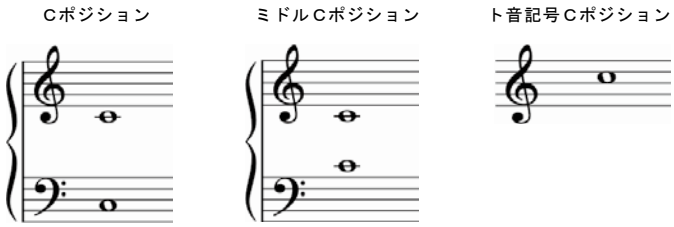


図３　山本（2017）による音域とポジション

※著者作成

他の教則本は、トンプソンとバーナムの導入書、バスティンが本教則本と同様にCポジションで始まっている。バイエルはト音記号Cポジション、グローバーの導入編はミドルCポジションとなっている。メトードローズは第一課では高音部譜表と低音部譜表の１段譜で書かれており、高音部譜表はC^5～G^5、低音部譜表はC^3～G^3の音域になっている。第二課ではその音域を合わせた大譜表で書かれている。

5）楽曲の構成

本教則本の113曲のうち、五郎自身が作編曲したものは96曲（85%）である（表３）。このうち、作曲と編曲の内訳は、それぞれ62曲（55%）と34曲（30%）となっている。半数以上が五郎の作品であり、編曲も含めると８割以上を占めるという点で、独自の教則本を作ろうとした五郎の意図がくみ取れる。五郎が作曲したもの以外はすべて外国の曲であり、ドイツやフランス、モラビアといった13の国や地方のものが取り入れられている。さらに、それらは親しみやすい民謡や古謡、キャロルのような歌が素材の楽曲から、クラシックの作品まで含まれている。

このような著者自身による作編曲、各国の民謡等の歌、クラシック作品という楽曲の構成に近い教則本はトンプソンとグローバーである。トンプソンは自作曲が全巻に含まれている。歌を素材にした楽曲は、民謡や自作のものを含め第１・２巻でみられる。第３巻では、本教則本と多少の違いはあるものの13か国の音楽が扱われている。その他にも交響曲やオペラ、室内楽の編曲や、子守歌、舞曲、ガボット等、「いろいろなパターンのリズム」として17種類を扱っている。クラシックの作曲家についても、バッハやベートーヴェンをはじめとする28名が取り上げられている。本教則本でも、24曲目にブラームスが作曲した交響曲第１番の第４楽章の第１主題による「シンフォニーより」といった交響曲や、105曲目にボッケリーニが作曲した弦楽五重奏「メヌエット」などの室内合奏の編曲がある。また、66曲目の「スラブ行進曲」や83曲目の「ワルツ」など、舞曲や行進曲のリズムも多く含まれている。グローバーも自作曲が全巻に含まれているほか、第３巻までは民謡が取り入れられている。舞曲や行進曲といったパターンのリズムも前半の巻から含まれており、巻が進むにつれてバッハやハイドンなどの作曲家の作品が増える。ただし交響曲やオペラ、室内楽についてはVOL.３に「イ短調の協奏曲より」としてグリーグのピアノ協奏曲の編曲が１曲あるのみで、教則本全体で扱われている他のクラシック作品はすべてピアノの独奏曲である。したがって、本教則本により近いのはトンプソンだといえる。

表３　本教則本の掲載楽曲

	曲名	作曲者（※１）	収録巻		曲名	作曲者	収録巻
1	二拍子	○	1	58	スコットランドのうた	スコットランドの歌／○	1
2	四拍子	○	1	59	冬	ボヘミア民謡／○	1
3	三拍子	○	1	60	汽車がとおる	○	1
4	ぞうのあゆみ	○	1	61	あられ	○	1
5	チェロをひく人	○	1	62	春のこだま	○	1
6	山のぼり	○	1	63	おじいさんとばしゃで	○	1
7	小舟にのって	○	1	64	悲しみ	○	1
8	シーソー	○	1	65	バロック風のエチュード	○	1
9	小さなおどり	○	1	66	スラブ行進曲	チャイコフスキー／○	1
10	ブランコ	○	1	67	谷間の教会	○	1
11	くつやさん	○	1	68	音楽隊が通る	○	1
12	蝶々	ドイツ民謡／○	1	69	かねがなる	フランス民謡／○	1
13	小さな蜜蜂	ドイツ民謡／○	1	70	スキーをする人々	○	1
14	おねだり	○	1	71	星ぞら	○	1
15	人形のおどり	○	1	72	ヴァイグルの主題	ヴァイグル／○	1
16	お父さま	フランス民謡	1	73	見しらぬ国	○	1
17	ものまねごっこ	○	1	74	ハンガリー風の行進曲	○	1
18	海のきらめき	○	1	75	ヴェニスの印象	○	1
19	春のおとずれ	○	1	76	きよし　このよる	グルーバー	1
20	わしはいいものもっている	フランス民謡／○	1	77	エコセイズ	○	1
21	おしゃれな帽子	モラビア民謡／○	1	78	きいちご（おどりの曲）	ウクライナ民謡／○	1
22	星がひかる	ワンパーディンク／○	1	79	ひとりぼっち	○	1
23	ピクニック	○	1	80	湖畔の城	○	1
24	シンフォニーより	ブラームス	1	81	はなふぶき	○	1
25	小さな音楽隊	○	1	82	やさしい音楽は流れて	ドイツ民謡／○	1
26	石のかいだん	○	1	83	ワルツ	○	1
27	わかもののおどり	外国の曲／○	1	84	美しい流れ	イギリス民謡／○	1
28	ボヘミアのうた	ボヘミア民謡／○	1	85	かわいい鳥	ポーランド民謡／○	1
29	いなかの庭	イギリス古謡／○	1	86	むかしのうた	○	1
30	カッコウ	ドイツ民謡	1	87	ジプシーのうた	ロシア民謡／○	1
31	かがやく星	イギリス民謡	1	88	カヌーにのって	○	1
32	ドイツのうた	ツェルニー／○	1	89	メヌエット	クラーク／○	1
33	きつつき	ドイツ民謡／○	1	90	ハープのしらべ	○	1
34	太陽の国	○	1	91	ロシアのうた	ロシア民謡／○	1
35	メヌエット	○	1	92	メヌエット	J.S.バッハ	1
36	ことりたちのうた	○	1	93	ワルツ	シューベルト／○	1
37	かざぐるまとチューリップ	○	1	94	オーストリアのワルツ	オーストリアの舞曲／○	1
38	バッグパイプ	チェコ民謡／○	1	95	ケリーダンス	アイルランド民謡／○	1
39	たいことラッパ	○	1	96	セレナーデ	クラーク／○	2
40	お日さまの光と花	○	1	97	サラバンド	コレルリ	2
41	人間とおうむと小鳥とライオン	○	1	98	ロマンツァ（ソナチネより）	ベートーヴェン	1
42	水にうつった景色	○	1	99	メヌエット	ベートーヴェン	1
43	指のトンネル	○	1	100	親きつつき　子きつつき	ルクーペ	2
44	臨時記号の練習	○	1	101	空中ブランコ	○	2
45	そよかぜ	○	1	102	バルカローレ	ハック	2
46	のはらであそぼう	○	1	103	ロンド	ディアベルリ	2
47	元気な騎手	○	1	104	ロンド	ニコライ	2
48	ホップ　ホップ　ホップ	ドイツ民謡／○	1	105	メヌエット	ボッケリーニ／○	2
49	よいしらせ	○	1	106	ペダルの練習曲	○	2
50	輪になっておどろう	○	1	107	グリーン・スリーブス	古いイギリスのキャロル／○	2
51	アヴィニョンの橋の上で	フランス民謡／○	1	108	ロマンス	スペイン民謡／○	2
52	田舎風のおどり	○	1	109	かわいいロマンス	ルンメル	2
53	小熊のガボット	○	1	110	アマリリス	ギース／○	2
54	回転木馬	○	1	111	ヴェニスの謝肉祭変奏曲	○	2
55	なわとび	○	1	112	エリーゼの為に	ベートーヴェン	新規
56	古いイギリスのうた	イギリス古謡／○	1	113	ブラームスのこもりうた	ブラームス／○	2
57	たこあげ	○	1				

（※１）○は五郎が作編曲したものを表す。

なお、本教則本には歌を素材にした楽曲が含まれていることは先述したが、歌詞つきの楽曲はなく、この点はバイエルとメトードローズ、バーナムが共通している。また、連弾もなく、独奏のみで構成されている点ではバーナムやトンプソンと共通している。つまり歌詞つきの楽曲も連弾もないのは本教則本のみである。歌詞や連弾が１曲もないという点は、ある程度１人で練習できる大人の初学者に向けられているようにも思われる。

３．考察

本教則本の全体的な構成は、今回比較対象とした教則本それぞれの要素を含んでいることがわかった。概要としては、教則本が１冊で完結している点はバイエルやメトードローズと同じであり、シンプルな挿絵はメトードローズとグローバーに近かった。対象年齢が子どもだけでなく、保育者養成のような大人の初学者も含まれている点はバイエルと共通していた。教則本の目的については、初学者の段階であっても音楽の喜びやピアノを弾く楽しさを感じ、練習していくうちに自然にテクニックを

身につけるという点でメトードローズやグローバーと共通していた。学習事項が示されている点はバイエル以外の教則本と同じであるが、その中でもワークブックのような要素はトンプソンやグローバー、バスティン、楽曲のフレーズを用いた予備練習はメトードローズやトンプソン、C ポジションの音域で学習を始める点はトンプソンやバーナム、バスティンと共通していた。自作曲と民謡だけでなく、クラシック作品も含んだ幅広い楽曲構成はトンプソンに最も近く、歌詞つきの楽曲と連弾の両方がない点はバーナムと共通していた。このように共通点を抽出すると、本教則本は特定の教則本に偏重しているわけでも、独自の路線を強く打ち出したわけでもないことがわかる。つまり、それぞれの要素を含んだバランス型の教則本であるといえるだろう。

教則本ごとに分けてみると、バイエルは１冊である点や大人も対象に含まれている点、歌詞つきの楽曲がない点が共通している。また、曲数の近さも含めると、本教則本はバイエルからの脱却を目指して作られたものであるが、学習事項の明示や進め方、楽曲構成といったカリキュラムに関する項目を除いた輪郭の部分は、むしろ似ているといえる。メトードローズは１冊である点に加え、教則本の目的や挿絵が共通している。『やさしくたのしいピアノメソード』という本教則本のタイトルが指し示すとおり、音楽の喜びやピアノを弾く楽しさを感じ、イメージを持って弾くこと、その中で自然にテクニックを身につけるという教育観への影響が示唆されている。トンプソンはワークブックの要素や楽曲のフレーズを使った予備練習、学習の最初の音域といった学習事項や楽曲構成が共通しているが、これはカリキュラムの中身にあたる部分といえる。バーナムは自身が描いた白黒の挿絵や、歌詞つきの楽曲と連弾のない点が共通している。特に挿絵を自分で描くという点は、絵画が趣味だった五郎が着想を得た可能性がある。グローバーは教則本の目的やワークの要素、楽曲構成が共通しているが、グローバー自体がトンプソンの影響を受けており、現代風の楽しい形にアレンジしたというコンセプトをもった教則本である[27)]。そのため、共通の要素はみられるものの、グローバーそのものからの影響は他の教則本と比較するとやや少ないようにも思われる。バスティンも C ポジションで学習を始める点やワークブックの要素は共通しているが、バスティン自体からの影響は少ない。これは、グローバーとバスティンが 1979（昭和 54）年に刊行された、当時の新しい教則本だったことが要因として考えられる。

本教則本のみにみられた特徴は、手や鍵盤のポジションではなく音域という言葉を使用している点と、調性の総まとめにあたる学習事項を置いている点の２点だった。どちらも音感に関する内容であり、特に最初の音域を C ポジションにしたのは音感を身につけるためであると「はじめに」で明言されている。我が国の音感教育は、1935（昭和 10）年に園田清秀（1903-1935）が創始したことで知られている。そして笈田光吉（1902-1964）によって体系づけられた後、一宮道子の『子どものバイエル』や田中スミの『いろおんぷ』、酒田冨治の音感研究所での実践などによって、戦後のピアノの普及とともに広まった経緯がある[28)29)]。また、笈田は五郎自身も 20 歳の頃からピアノを師事していた人物でもある[30)]。この我が国の音感教育に関する動向は、決して本教則本に無関係ではないだろう。

おわりに

本稿では、五郎の教育者としての最も重要な功績である『やさしくたのしいピアノメソード』の改訂版に着目し、全体的な構成について同時代の６種類の教則本と比較しながら検討した。その結果、本教則本の特徴は同時代の教則本の要素を含んだバランス型の教則本であることが明らかとなった。その中でも、今回比較した教則本の中では、バイエルの体裁や対象年齢、メトードローズの教育観、トンプソンのカリキュラム、バーナムの自作の挿絵に特に共通点が見いだせた。また、外国の教則本の特徴だけでなく、当時の我が国で広まっていた音感教育も取り入れられていることも示唆された。本教則本が刊行された 1980 年代は、前身の『PIANO METHOD』が刊行された 1970 年代に続き、外国の教則本の邦訳や国産の教則本が数多く生まれた時代である。本教則本の作成にあたり、五郎が数多くの教則本を参照したことは想像に難くない。1976（昭和 51）年の時点で保育者養成校の 93%

がバイエルを使用していた時代において、他の教則本の特徴や我が国の音感教育を取り入れて独自の教則本を作ったことは、大きな意味があるといえる。

なお、今回は本教則本の全体的な内容のみに着目した調査に留まった。そのため、今回得られた結果は本教則本の特徴の一部分にすぎない。今後は本教則本の楽曲に焦点を当て、より詳細に本教則本の特徴や独自性を捉えることで、明確な位置づけを試みたい。教育観やカリキュラムといった教則本の中身はバイエルからの脱却を目指したことが見いだせたが、表面的な側面であるため、具体的な内容を検証する必要があるだろう。そして、「保育の白梅」の礎の一端を築いた五郎のピアノ教育観に迫っていくことが、彼の再評価に向けた当面の目標である。

謝辞

本稿の執筆にあたり、共同音楽出版社から『やさしくたのしいピアノメソード改訂版』および本教則本に関する情報を提供していただきました。心より感謝申し上げます。

《注》

1）山川智馨（2020）「没後 20 年の鷲見五郎―音楽家・音楽教育者としての再評価にむけて―」『音夢：わらべ館　童謡・唱歌研究情報誌』第 14 号、pp. 26-37

2）白梅学園大学・短期・大学院ウェブサイトで公開されている 1992 年度以降のシラバスを閲覧し、2006 年度から 2018 年度まで本教則本が使用されていることを確認した。なお、1995 年度から 2005 年度までの使用テキストは『ピアノメソード』と記載されているが、どの教則本を指しているかは不明である。

3）民秋言（2002）「鷲見五郎先生のお人柄」『地域と教育』第５号、p. 36

4）鷲見五郎（1973）『PIANO METHOD』ワコー楽譜出版社、p. 1

5）「今井久仁子先生」『白梅学園短期大学紀要』（1995）第 31 号、p. 250

6）前掲５）

7）共同音楽出版社へメールおよび電話で問い合わせ、本教則本が現在は絶版となっていること、絶版時期は不明であることについて回答をいただいた。

8）山本美芽（2017）『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』音楽之友社、pp. 92-93

9）前掲３）

10）この頃に出版された大学独自のピアノ教則本は、たとえば 1960（昭和 35）年に発行された頌栄短期大学の『楽しい音楽と幼児』がある（関田・布村、2017）。

11）宮脇長谷子（2001）「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題――養成校へのアンケート調査を通して――」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』15-w 号（2001 年度）-１、p. 1　なお、1976（昭和 51）年の調査で養成校の 93%がバイエルを使用していると明らかにしたのは笠井（1977）であるが、笠井の先行研究は CiNii、J-STAGE および国立国会図書館の文献検索いずれでも見つからなかったため、宮脇の先行研究から二次引用した。

12）鷲見五郎・白梅学園短期大学保育科ピアノ編集委員会編（1989）『学生のためのピアノメソード』共同音楽出版社、p. 2

13）中村礼香（2015）「ピアノ初心者のレッスンにおける教則本の比較」『鹿児島女子短期大学』第 50 号、pp. 77-88

14）山路麻佳（2020）「保育者養成におけるピアノ演奏技術の習得に関する考察―初心者のための教則本の比較―」『西南女学院大学紀要』Vol. 24、pp. 131-132

15）山本美芽（2017）『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』音楽之友社

16）前掲 13）p. 78

17）前掲 13）p. 83

18）鷲見五郎『やさしくたのしいピアノメソード改訂版』共同音楽出版社、1989、p. 3

19）原文では「ト音記号」「ヘ音記号」は記号で表記されている。
20）エルネスト・ヴァン・ド・ヴェルド著・安川加寿子訳編（1951）『メトードローズ・ピアノ教則本　ピアノの一年生』音楽之友社、p. 3
21）ディビッド・カー・グローバー／ルイス・ギャロウ共著（1979）『グローバー・ピアノ教本〈導入編〉』ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス、p. 2
22）エドナ・メイ・バーナム著・大島正泰監修・中村菊子解説、訳（1975）『バーナム　ピアノテクニック導入書』全音楽譜出版社、p. 2
23）ジェームズ・バスティン著・日本バスティン研究会訳（1979）『バスティンピアノライブラリー　ピアノレッスン　レベルⅠ』東音企画、p. 2
24）安田寛（2012）『バイエルの謎　日本文化になったピアノ教則本』音楽之友社、p. 162
25）前掲15）p. 43
26）前掲18）
27）前掲15）p. 79
28）前掲22）pp. 130-155
29）小山文加（2013）『音感教育の歴史的考察』ヤマハ音楽振興会　ヤマハ音楽研究所調査レポート、pp. 2-5 https://www.yamaha-mf.or.jp/onken/report/（2023年2月20日閲覧）
30）鷲見三郎著作刊行会（1989）『ヴァイオリンひとすじに』p. 65

《参考文献》

・青山雅哉（2010）「ピアノ教則本の特徴Ⅰ―バイエルピアノ教則本について―」『奈良文化女子短期大学紀要』第40号、pp. 1-7
・浅見英夫（1979）「バスティーンピアノメソードについて」『東京家政大学研究紀要』第19集（1）pp. 19-29
・石山英明（2019）「バイエルの楽曲分析（1）―初学者のために―」『桜花学園保育学部研究紀要』第19号、pp. 17-27
・近藤久美（1996）「初心者向けピアノ教本についての研究（2）アメリカ系ピアノ教本の場合」『一宮女子短期大学紀要／一宮短期大学編』第35号、pp. 169-181
・関田良・布村志保（2017）「保育者養成における音楽教材の変遷～1950年代のピアノ教材を中心に～」『頌栄短期大学研究紀要』第41巻、pp. 29-43
・徳冨聖子・安原雅之（2004）「ピアノ教則本の比較研究にむけて」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第18号、pp. 75-86
・前田美樹（2012）「『子どもの歌』ピアノ指導法Ⅰ―『バイエルピアノ教則本』と『メトードローズピアノ教則本』の比較から―」『青森中央短期大学研究紀要』第25号、pp. 41-51

《参考URL》

・「Bastien　進化し続けるピアノメソッド　バスティン♪」東音企画 https://www.to-on.com/bastien/（2023年2月27日閲覧）

《参考楽譜》

・フェルディナンド・バイエル著・全音楽譜出版部編（1955）『全訳バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社
・ジェームズ・バスティン著・日本バスティン研究会訳（1979）『バスティンピアノライブラリー　ピアノレッスン　レベルⅡ～Ⅳ』東音企画
・エドナ・メイ・バーナム著・大島正泰監修・中村菊子解説、訳（1975）『バーナム　ピアノテクニック1～4』

全音楽譜出版社
・ジョン・トンプソン編著・大島正泰訳（1972）『トンプソン現代ピアノ教本１～５』全音楽譜出版社
・ディビッド・カー・グローバー／ルイス・ギャロウ共著（1979）『グローバー・ピアノ教本 VOL. １～６』ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス
・鷲見五郎（1981）『やさしくたのしいピアノメソード』共同音楽出版社
・鷲見五郎（1982）『やさしくたのしいピアノメソード（２）』共同音楽出版社